

引用された談話において自身を指す指示語について

Demonstratives which refer to him/herself in a quoted utterance金井 勇人ⁱ

KANAI Hayato

(要旨)

話し手が、他人の談話を引用してそこに登場する自分自身を表現するとき、指示語を使用することがある。そのとき、どのような指示語を選択するだろうか。このような興味を抱いたのが、本稿の執筆の動機である。本稿では、「-いつ」系の指示語（こいつ、そいつ、あいつ）を取り上げて考察を行う。これらの指示語は、引用した他人の談話内で、どのように選択されるのだろうか。結論を述べると、引用された談話内では、自身を指すのに「こいつ」「あいつ」が専ら用いられる。一方、「そいつ」は用いられない。これは、コソアの（非）直示性に関わっていると考えられる。また、「こいつ」と「あいつ」では、話し手の伝えたいニュアンスが異なる。

キーワード：引用された談話、「-いつ」系の指示語、侮蔑の用法、卑下の用法、コソアと（非）直示性

1. はじめに

本稿で中心的に取り上げる指示語は、「こいつ」「そいつ」「あいつ」という「-いつ」系のものである。これらは、モノ・人をぞんざいに指す。

- (1) 「だめだ」と万吉が云った、
「この柱あびくともしねえぜ」
「こいつをどけなくっちゃあどうにもならねえ」と栄二が云い返した、
「もうひとふんばりやってみろ、さあ」（さぶ）
- (2) 「その男を渡して下さい」と栄二が云った、
「相手はあっし一人、ほかの者は見に来ただけです」
「きさまはぶしゅうだな」と松田が云った、
「こいつにどんな恨みがあるんだ」（さぶ）

(1)の「こいつ」は「この柱」というモノを、(2)の「こいつ」は「その男」という人を、それぞれぞんざいに指している。もしそうでなければ、それぞれ「これ」「この人」などと言うことができる。

- (1)' 「これをどけなくっちゃあどうにもならねえ」
(2)' 「この人にどんな恨みがあるんだ」

このように「これ」「この人」などではなく、「こいつ」で指すということは、その対象をぞんざいに扱っていることを含意する。つまり基本的には、そのような態度の発話において、これら「-いつ」系の指示語が

ⁱ 埼玉大学 国際交流センター 助教

現れるのだと考えられる。

したがって、一見すると「-いつ」系の指示語は（理解語彙としてはともかく）使用語彙としての必要性は低い、と考えられる。しかし日常生活において、話し手が「-いつ」系の指示語によって自身をぞんざいに指すというケースも、少なくない。

(3) う～ん、僕は、先生に頼み事をされることがなかったなあ。たぶん、「こいつには任せられない」と思われていたのかも？ⁱⁱ

(4) ここまで口を出されるんだったら、むしろ私も「あいつじゃダメだからやらせるな」って会社に言われたほうが楽で嬉しいんですがね。

(3)(4)の「こいつ」「あいつ」は、直接引用の形式で談話を設定し、その談話内において、話し手（語り手）（以下「話し手」で代表させる）自身を指す。

このように「-いつ」系の指示語で自身を指すことで、話し手は自身を低めて扱うことができる。これは敬語表現の一種であると考えられる。すなわち、次のような発話には、多少の違和感を覚える。

(3)' う～ん、僕は、先生に頼み事をされることがなかったなあ。たぶん、「この人には任せられない」と思われていたのかも？

(4)' ここまで口を出されるんだったら、むしろ私も「あの人じゃダメだからやらせるな」って会社に言われたほうが楽で嬉しいんですがね。

(3) '(4)'の「この人」「あの人」であっても、もちろん文法的には問題がない。しかしながら、敬語表現の観点から考えると、どうも自身の低め方が足りないように感じられてしまう。この(3) '(4)'のような発話に接すると、「-いつ系」の指示語も、使用語彙としての必要性も低いとは一概には言えない、と思われてくる。

以上のように、本稿では、引用された談話内に話し手自身が現れるとき、話し手は自身をどのような「-いつ」系の指示語で指すだろうか、ということ論じていく。また、この用法は「こいつ」「あいつ」に偏る傾向がある。本稿では、その理由についても論じる。

2. 「-いつ」系の指示語の位置づけと考察の対象

「-いつ」系の指示語は、モノ・人をぞんざいに指す。例えば、正保(1981:61)では、指示語の体系（コソアド）を紹介する中で、「-いつ」系の指示語を次のように位置づけている。ⁱⁱⁱ

表1

	近称	中称	遠称	不定称
もの・人（卑）	コイツ	ソイツ	アイツ	ドイツ

つまり、「-いつ」系の指示語は、「(卑) = 卑語」ということである。

吉田(2000:194)においても、「近称・中称・遠称・不定称」を「コ系・ソ系・ア系・ド系」と言い換えてはいるが、「-いつ」系の指示語を「卑語」としている。以上から、「-いつ系」の指示語が卑語であることに疑義を挟む余地はない。

ⁱⁱ 出典を記していない例文は、（インターネット上の文章を参考にした）作例である。

ⁱⁱⁱ 表1では、「近称」「中称」「遠称」と区分されている（不定称は本論には関係ないので無視する）が、これは、話し手からの距離に基づいた区分である。「-いつ」系の指示語が聞き手の領域を指すこともあるが、聞き手そのものを指すことはできない。つまり「-いつ」系の指示語は、常に三人称指示となる。

ただし本稿の関心は、「-いつ」系の指示語によって、話し手が自身を指す場合にある。話し手も人であるから、したがって、本稿の考察は「-いつ」系の指示語が人を指す場合のみを対象とし、モノを指す場合は対象の範囲外とする。^{iv}

その上で、「-いつ」系の指示語が人を指すという場合、(前節でも見たように) それには2通りあることが分かる。1つは他者(話し手以外)を指す場合であり、1つは話し手自身を指す場合である。

前者の用法は、発話意図そのものが他者をぞんざいに扱うことにある。これを本稿では「侮蔑の用法」と呼ぶことにする。一方、後者の用法は、ぞんざいに指す対象が話し手自身である。これを本稿では「卑下の用法」と呼ぶことにする。もちろん「侮蔑の用法」が基本であって、それを自身を指すのに用いた場合に、2次的に派生するのが「卑下の用法」である。

以下では、まず他者を指す「侮蔑の用法」を概観する。その後、本稿の考察対象である話し手自身を指す「卑下の用法」についての検討に入る。

3. 侮蔑の用法(他者を指す場合)

まず、「-いつ」系の指示語が他者を指す場合(侮蔑の用法)を概観する。現場指示と文脈指示に分け、別々に見ていくことにする。

3-1 現場指示

以下は、現場指示における侮蔑の用法である。それぞれ、「-いつ」系の指示語で指す対象を、ぞんざいに扱っている。

(5)「おれが投げて、こいつが打った」彼はそう言い、バットをかついだまま何も考えられぬほどにすくみあがっている部員を指さした。(エディプスの恋人)

(6)(=2)「その男を渡して下さい」と栄二が云った、「相手はあっし一人、ほかの者は見に来ただけです」「きさまはぶしゅうだな」と松田が云った、「こいつにどんな恨みがあるんだ」「あんたの知ったこっちゃあねえ」栄二は低い声できっぱりと云った、「そいつをこっちへ渡して下さい」

(7) 三人の男たちは何もできなくなってしまったぼくたちを薄闇の中でもう一度黙って見つめ、それからさっき来た時のようにまたゆっくり歩きだした。

「なんだあ? あいつら...」(新橋烏森口青春篇)

(5)では、近称の「こいつ」によって「部員」を、(6)では、中称の(あるいは聞き手領域を指す)「そいつ」によって「その男」を、(7)では、遠称の「あいつ(ら)」によって「三人の男たち」を、それぞれぞんざいに指している。^v

^{iv} 堤(2002)は「ソイツの「イツ」には [+human, +insult] とでも表せるような素性が少なくとも関わっている」と、堤(2002:61)の注7において述べている。本稿で考察対象とする「-いつ」系の指示語は、まさに [+human, +insult] と規定できる。

^v (6)の「そいつ」が中称のソであるか、聞き手領域を指すソであるかは、当事者たちの位置関係によって決まる。「栄二」と「松田」が位置的に近く、そこから「男」が中距離にいれば、中称のソである。一方、両者が対立する位置関係にあり、「男」が「松田」の側にいれば、聞き手領域を指すソである。

3-2 文脈指示

次に、文脈指示における侮蔑の用法を見る。現場指示の場合と同じく、「一いつ」系の指示語の対象は、それぞれぞんざいに扱われている。

- (8) で、田中美佐子のダンナの深沢邦之。こいつ、『凍りつく夏』で俳優までやっていますよね。なんか勘違いモードはいっちゃってそうだなあ…。(芸能博物館)
- (9) これを人からもらって喜んでる男がいたんですよ。そいつが「おまえら、こんな時計は買えないだろ」とか言ってね。(ホホホのほ)
- (10) 「綿文の旦那も、あの町内の頭も、そしてあの目明しの二人も赦せない」と栄二は囁いた、「あいつらにはきっと思い知らせてやる、生涯、忘れることのできないような手段でな、まあ待っている」(さぶ)

(8)の「こいつ」は「深沢邦之」を、(9)の「そいつ」は「男」を、(10)の「あいつら」は「綿文の旦那、町内の頭、目明しの二人」を、それぞれ指す。

これらに共通しているのは、それぞれ先行文脈に先行詞が現れていて、「こいつ」「そいつ」「あいつ」がそれらの先行詞と照応している、ということである。

ただし、純粋な文脈指示と言えるのは、(9)の「そいつ」のみである。金水(1999)は、文脈指示(下記では「文脈照応用法」「非直示用法」に相当する)における指示語の性質について、次のように述べている。

- (11) コ系列とア系列は、直示用法が原型的な用法であり、文脈照応用法と見られるものでも、直示的な性質を色濃く残している。…(中略)…ソ系列の非直示用法は、アやコとは違って、直示としての性質をいっさい持たないことによって特徴づけられるのである。(金水 1999:87)

つまり、(9)の「そいつ」のみが、「男」をまったく非直示的に指している。言い換えれば、「男」の属性は、専ら「これを人からもらって喜んでる」という先行文脈から付与されているのである。^{vi}

これとは異なって、(8)の「深沢邦之」は、確かに先行文脈に出てくるが、「深沢邦之」が眼前にいる、という状況を仮定して、その「深沢邦之」を「こいつ」によって、あたかも直示的に指す、というニュアンスがある。したがって「田中美佐子のダンナの」は、あくまで付加的な情報でしかない。

(10)の「綿文の旦那、町内の頭、目明しの二人」も同じく、確かに先行文脈に出てくるが、彼らの存在は話し手の記憶内にあって、その記憶内の彼らを「あいつ(ら)」によって直示的に指すのである。このような用法を、金水(1999:71)に従って、「記憶指示用法」と呼ぶことにする。

- (12) 記憶指示一般について言えば、現に眼前に存在する対象ではないので、直示的である必然性はないが、記憶内の場面を眼前の状況と同等に扱えば、直示と同じ方法によって記憶内の要素を指示することも可能なはずである。アの記憶指示用法とは、このような拡張的な直示によるものと考えることができる。…(中略)…一般に、アの文脈照応用法と呼ばれるものは、すべてこの記憶指示用法である。(金水 1999:72)

次の例は、先行詞が出てこないから、記憶指示用法の分かりやすい例と言えるだろう。

- (13) 「あいつだった」と栄二が云った、「さぶのやつだったんだ」
「なにがですか」

「綿文の金欄の切よ」と栄二は顔をしかめながら云った、…(さぶ)

(13)では「栄二」の記憶内に「さぶ」の存在があり、その記憶内の「さぶ」を、「あいつ」によって直示的に

^{vi} 庵(2007)は、このような先行文脈からの属性の付与を「テキストの意味の付与」と呼んでいる。

指しているわけである。

以上、観察してきたように、現場指示においても、文脈指示においても、「-いつ」系の指示語で他者を指すということは、その対象をぞんざいに扱うことになる。これらが本稿で言う「侮蔑の用法」に相当するものである。^{vii}

4. 卑下の用法（話し手自身を指す場合）

以上、侮蔑の用法を概観した。それを踏まえて、本章では、本題である「卑下の用法」を検討していく。「-いつ」系の指示語によって話し手自身を指す、という用法である。繰り返しになるが、この「-いつ」系の指示語は、侮蔑の用法が基本であって、これから検討する「卑下の用法」は、侮蔑の用法から派生する2次的な用法である。

4-1 具体的な事例

直接引用の形式で設定された場面内で、話し手自身を「-いつ」系の指示語で指すことにより、この卑下の用法は成立する。^{viii}

(15)(=3) う～ん、僕は、先生に頼み事をされることがなかったなあ。たぶん、「こいつには任せられない」と思われてたのかも？

(16) すると先生は、一笑に付すどころか、けっこうまともにとりあってくれて、「お、それはすごいじゃないか」って真剣に聞いてくださるんですよ。先生が「ほう、こいつはなんかすごいことを考えているな」というふうに対応してくれるんで、私もいい気になっていると…。

（もっとウソを！男と女と科学の悦楽）

(17)(=4) ここまで口を出されるんだったら、むしろ私も「あいつじゃダメだからやらせるな」って会社に言われたほうが楽で嬉しいんですがね。

(18) それにしても、なんとかしてこのような状態から抜けだしたい、たとえ錯覚でもよいから「あいつはおもしろい奴だ」と言われる一人前の中学生になりたいという欲求も、強く周二を襲った。

（楡家の人びと）

(19) 京大というところは、動機の面白さとか変わったことをするやつを、わりあい評価してきたんだ。僕なんか京都に呼ばれたのは、あいつ東京におけるのにオモロイこと言うてる、ということだったんでしょう。（もっとウソを！男と女と科学の悦楽）

(15)~(19)の「こいつ」「あいつ」は、直接引用の形式で設定された場面内で、話し手が話し手自身をぞんざいに指している。これらは、東郷(2002:35)の「談話モデルの埋め込み」という概念を援用すると、次のように

^{vii} ただし侮蔑の用法は、“愛着”とでも言うべき表現効果を発する場合もある。

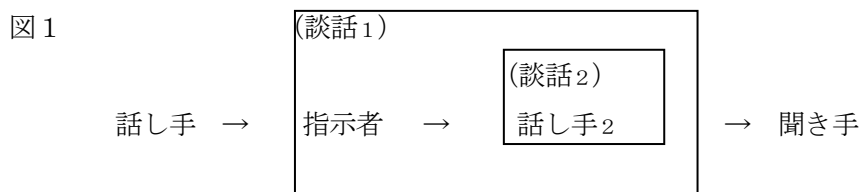
(14) 「ほら、ここに、ブリスコってあるでしょ」…（中略）…

「こいつは凄いやつなんだ。俺がプロに入った時もう世界ランキングに入っていたんだけど、それから十年、まだランキングに入っている。これは世界チャンピオンにならなくとも、やっぱり凄いことだと思うんだ」（一瞬の夏）

(14)の「こいつ」からは、「ブリスコ」に対する“愛着”のようなものが感じられる。ただしそのニュアンスは、ぞんざいに指すことの、あくまで“副産物”に過ぎず、「-いつ」系の指示語の本質的な含意とは言えない。

^{viii} 以下の発話における引用は、形式的には直接引用であっても、実は話し手の手が加わっている可能性が高い。特に指示語は、多くの場合、話し手によって選択されるだろう。つまり、実質的には間接引用と言ってよい。

図示することができる。^{ix}



「話し手」が「聞き手」に語る談話が「談話1」である（図1では外側の枠で表される部分）。そして、直接引用の形式で「談話1」に埋め込まれた談話が「談話2」である（図1では内側の枠で表される部分）。^x

「談話1」内には「指示者」が登場する。そして、「談話1」に埋め込まれた「談話2」内に、被指示者としての「話し手2」が登場する。「話し手2」というのは、「談話2」内に登場する「話し手」の分身である。例えば(15)では、

談話1：「う～ん、僕は、先生に頼み事をされることがなかったなあ。たぶん、「こいつ」には任せられない」と思われてたのかも？」

談話2：「こいつ」には任せられない」

ということになる。

(15)では「談話1」を語る「話し手」が「僕」、「談話1」を聞くのが（例文には登場しないが）「聞き手」である。「談話1」内に登場する「指示者」が「先生」、その「先生」が「談話2」内において「話し手2」を指している。これが「-いつ系」の指示語による「卑下の用法」の構造と言える。

4-2 「こいつ」「あいつ」への偏り

ここで重要なのは、この卑下の用法は、「こいつ」「あいつ」に偏ると思われることである。このことは、侮蔑の用法では「こいつ」「そいつ」「あいつ」と、コソアのすべてが出現したのと、事情が異なる。

逆に言えば、この卑下の用法では、「そいつ」が用いられにくい、ということである。試みに、(15)~(19)の「こいつ」「あいつ」を「そいつ」に置き換えてみたい。

(15)' う～ん、僕は、先生に頼み事をされることがなかったなあ。たぶん、「?そいつ」には任せられない」と思われてたのかも？

(16)' すると先生は、一笑に付すどころか、けっこうまともにとりあってくれて、「お、それはすごいじゃないか」って真剣に聞いてくださるんですよ。先生が「ほう、?そいつはなんかすごいことを考えているな」というふうに反応してくれるんで、私もいい気になっているいろと…。

(17)' ここまで口を出されるんだったら、むしろ私も「?そいつ」じゃダメだからやらせるな」って会社に言われたほうが楽で嬉しいんですがね。

(18)' それにしても、なんとかしてこのような状態から抜けだしたい、たとえ錯覚でもよいから「?そいつ」はおもしろい奴だ」と言われる一人前の中学生になりたいという欲求も、強く周二を襲った。

^{ix} 東郷(2002)では、ある談話が行われた時間・場所を「今1・ここ1」とし、そこに埋め込まれた談話が行われた時間・場所を「今2・ここ2」とした上で「新たに構築された「今2・ここ2」をパラメータとする談話モデルは、「今1・ここ1」の談話モデルのなかの、言語文脈領域に埋め込まれたものと見なすことができる（東郷 2002:35）」と述べられている。

^x ただし、(18)は独り言なので、「聞き手」は実際には存在しない。あえて言えば、「聞き手」＝「話し手」である（むしろ、これが一般的な独り言の構造だと言えらるう）。

(19) 京大というところは、動機の面白さとか変わったことをするやつを、わりあい評価してきたんだ。僕なんか京都に呼ばれたのは、?そいつ東京におるのにオモロイこと言うてる、ということだったんでしょう。

このように「そいつ」に置き換えてみると、座りが悪く感じられてしまう。その理由について、以下で具体的に考察していく。

4-2-1 「こいつ」について

まず、(15)(16)のような「指示者」が「話し手2」を「こいつ」で指す場合について、検討する。

このとき、「談話2」では現場指示が設定される。つまり「指示者」が「話し手2」を近称の「こいつ」によって指す、ということである。それでは、なぜ近称の「こいつ」が選ばれるのか。

「談話2」とは、そもそも仮定の場面に過ぎない。「話し手」が自由に構築してよいものである。とは言え「話し手」は、「聞き手」が「談話2」を処理する際の負担を軽くする、という語用論的な制約を担っているものと考えられる。^{xi}

つまり「聞き手」は、「談話2」を“再現”しなければならない。そのとき「聞き手」にとって、談話処理の負担が最も軽いのは、「指示者」が「話し手2」を近称の「こいつ」で指す場合であるだろう。なぜなら、近称の「こいつ」であれば、「指示者」と「話し手2」との間に位置的（空間的）な乖離が生じない（つまり融合型において同じコの領域にいることになる）からである。

ここで、次のような語用論的な制約が導き出される。

(A) 埋め込まれた「談話2」内において“再現”される指示行為は、「聞き手」にとっての処理の負担を軽くするために、「指示者」と「話し手2」が位置的（空間的）に乖離してはならない。

以上の考察から、文法的な理由ではなく、「話し手」から「聞き手」への配慮という語用論的な制約により、近称の「こいつ」が選ばれるのだと考えられる。

4-2-2 「あいつ」について

次に、(17)~(19)のような「指示者」が「話し手2」を「あいつ」で指す場合について、検討する。

このとき、「談話2」では記憶指示が設定される。「指示者」が「話し手2」を、記憶指示の「あいつ」によって指す、ということである。それでは、なぜ記憶指示の「あいつ」が選ばれるのか。

「話し手」が設定した「談話2」を、「聞き手」は、やはり“再現”しなければならない。そのとき(A)の制約を満たすことが、円滑な対話にとっては必須である。近称の「こいつ」の他に、(A)の制約を満たせるのは、記憶指示の「あいつ」である。

そうであれば、「聞き手」は、「指示者」が、記憶指示の「あいつ」によって「話し手2」を指す、という状況を“再現”すればよい。そのように場面を設定することによって、「話し手」は(A)の制約を満たせる。

もし、これが（記憶指示でなく）現場指示の「あいつ」だとすると、「指示者」と「話し手2」との位置的（空間的）な乖離が生じてしまう（つまり融合型において「指示者」はコの領域に、「話し手2」はアの領域にいることになる）ので、「聞き手」にとって談話処理の負担は重くなる。

しかし、記憶指示の「あいつ」であれば、そのような位置的（空間的）な乖離は生じない。したがって、「聞き手」の談話処理の負担も重くならないわけである。

^{xi} 金水(1999:75)には、「聞き手負担制約：聞き手が発話を処理する際にかかる負担を最少にせよ」とある。本節で論じる現象も、この「聞き手負担制約」の観点から説明できるものと思われる。

4-2-3 「そいつ」について

以上の理由から、「こいつ」「あいつ」が積極的に選ばれる理由が明らかになった。それでは最後に、なぜ「そいつ」が選ばれにくいのか、について考えたい。

まず、(15)′~(19)′の「そいつ」を現場指示における中称のソと仮定する。すると「指示者」と「話し手2」との間に位置的（空間的）な乖離が生じてしまい（融合型において「指示者」はコ領域に、「話し手2」はソ領域にいることになる）、(A)の制約を満たせない。そのため、「聞き手」の談話処理の負担が重くなるので、「そいつ」は選ばれにくいのだと考えられる（聞き手領域を指すソと考えると、同様の理由で不可）。

次に、(15)′~(19)′の「そいつ」を文脈指示であると仮定する。(11)で見たように、コ系・ア系の指示語は、先行詞が現れていても、直示的な性質を持っている。ところがソ系の指示語は、完全に文脈情報のみに依拠する（つまり完全に非直示的である）。したがって、次のように、「談話2」内の先行文脈に先行詞を置いておけば、「そいつ」も不自然ではない。

(18)″ それにしても、なんとかしてこのような状態から抜けだしたい、たとえ錯覚でもよいから「周二という男がいるんだが、そいつはおもしろい奴だ」と言われる一人前の中学生になりたいという欲求も、強く周二を襲った。

(18)″では、先行文脈に「周二」が登場するので、完全に非直示的な文脈指示として「そいつ」が成立する。ただし、結局のところ、「話し手」と「話し手2」は同一人物であるから、「話し手」が「話し手2」を先行詞として登場させるのは、極めて不自然である。

卑下の用法において、「指示者」が「話し手2」を指すために、ソ系の指示語が選ばれにくいのは、以上のような理由によるものと考えられる。

4-3 「こいつ」「あいつ」のニュアンスの相違について

「こいつ」で指す場合、「談話2」では現場指示が設定される。だからこそ(16)のように現場の詳しい描写が先行している場合には、「こいつ」が適当となる。

(16)″すると先生は、一笑に付すどころか、けっこうまともにとりあってくれて、「お、それはすごいじゃないか」って真剣に聞いてくださるんですよ。先生が「ほう、こいつ/?あいつはなんかすごいことを考えているな」というふうに反応してくれるんで、私もいい気になっていろいろと…。

このとき、「指示者」＝「先生」が、近称の「こいつ」で指すことで、「被指示者」＝「話し手2」が眼前にいる、という臨場感を醸し出せる。

一方、(16)のように現場の詳しい描写が先行している場合、記憶指示の「あいつ」はやや不自然となる。現場が詳しく描写されているなら、記憶指示より、現場における直示が優先されるから、と考えられる。^{xii}したがって、現場が詳しく描写されている場合は「あいつ」は適当ではない、と帰結できる。

しかしこのことは、必ずしも、現場が詳しく描写されていない場合は「こいつ」は適当ではない、ということの意味しない。

例えば、(15)では、現場の詳しい状況が描写されているわけではないが、「こいつ」でも自然である。なぜなら、そのような場合に「こいつ」を用いたとしても「聞き手」は何らかの“具体的な現場”を“自由に”

^{xii} これは金水・田窪(1992:145)の主張する「指示トリガー・ハイラーキー：現場>経験スペース>>その他」に合致する。つまり、ある同一の対象を指すとき、現場指示（現場における直示）で指せるのであれば、それが第1に優先される。そうでないとき、記憶指示で指せるのであれば、それが第2に優先される。そしてどちらも可能でないときに「その他」、すなわち文脈照応的な指示が行われる。日本語のコソアの使用には、このような優先順位が存在するという主張が、「指示トリガー・ハイラーキー」である。

設定してよいからである。^{xiii}

そのようなことも可能ではあるが、先行文脈で現場の詳しい状況が描写されていない(17)~(19)において、「あいつ」が選ばれているのは、「聞き手」に要求されるのが、「指示者」によって行われた（現場指示ではなく）記憶指示の“再現”だからである。

現場指示の「こいつ」で指す場合は、「指示者」が「話し手2」を、その現場でまさに眼前にしている、という臨場感を醸し出す。これに対して、記憶指示の「あいつ」で指す場合には、「指示者」が「話し手2」をこれまでの直接的な経験を通して知り得ている、というニュアンスを醸し出す。

以上の考察から、「こいつ」を選ぶか、「あいつ」を選ぶかは、「話し手」の伝えたいニュアンスによって決定されるものと考えられる。^{xiv}

5. まとめ

「一いつ」系の指示語は、指示対象をぞんざいに指す。したがって、他者を指す場合には「侮蔑の用法」となる。また一方で、「一いつ系」の指示語は、埋め込まれた談話（談話2）内で、話し手自身（話し手2）を指すこともできる。この場合は、「卑下の用法」となる。この「卑下の用法」は、「侮蔑の用法」から派生する2次的な用法である。

卑下の用法では、話し手自身を指すのに「こいつ」「あいつ」が積極的に選ばれる。それは、語用論的な制約(A)によるものと考えられる。

(A) 埋め込まれた「談話2」内において“再現”される指示行為は、「聞き手」にとっての処理の負担を軽くするために、「指示者」と「話し手2」が位置的（空間的）に乖離してはならない。

「こいつ」によって「話し手2」を指す場合は、「談話2」では現場指示が設定される。したがって、近称の「こいつ」で指すのが、「聞き手」が談話を処理する際の負担が最も軽い（つまり融合型において「指示者」と「話し手2」が同じコの領域にいることになり、位置的（空間的）な乖離が生じないため）。

「あいつ」によって「話し手2」を指す場合、「談話2」では記憶指示が行われる。このとき「指示者」による記憶指示を“再現”すればよいのであるから、これもまた「聞き手」が談話を処理する際の負担は軽い（この場合も「指示者」と「話し手2」との位置的（空間的）な乖離は生じない）。

「一いつ」系の指示語は卑語であるとされる。「侮蔑の用法」については、確かに、理解語彙としての必要性に比して、使用語彙としての必要性は低いだろう。しかしながら、本稿の冒頭で見た(3)′(4)′のような違和

^{xiii} ただし(19)では、「東京」と「京都」という2つの場面が出てくるので、客観的事実関係を同じに保ったままで「こいつ」を使うことは難しい。つまり「あいつ」の場合、「指示者」は「京都」にいたことが含意される（記憶指示）のに対し、「こいつ」を使った場合、「指示者」は「東京」にいたことが含意される（現場指示）。

^{xiv} そのようなニュアンスを一切出したくない場合には、「彼／彼女」を使用することができる。

(15) う～ん、僕は、先生に頼み事をされることがなかったなあ。たぶん、「彼には任せられない」と思われてたのかも？

(17) ここまで口を出されるんだったら、むしろ私も「彼女じゃダメだからやらせるな」って会社に言われたほうが楽で嬉しいんですがね。

小出(1995)では、「彼／彼女」について、次のように述べられている。

「彼」類が指示詞と最も異なる点は、非経験媒介的でもよいという点である。…（中略）…これは、「彼」類が、自らの経験に基づかない知識を記述することができるという性質ゆえに、過剰に自らの経験を暗示してしまうことを排除するための記述方法であると考えられる」（小出 1995:18）

上記はア系の指示語と「彼」類との比較であるが、このことはコ系の指示語と「彼」類の比較においても、同様に成立するだろう。

感のある発話を避けるためには、この「卑下の用法」も、まったく無視してよいというものではない。

参考文献

- 庵功雄 (2007) 『日本語におけるテキストの結束性の研究』 くろしお出版
- 加藤重広 (2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』 ひつじ書房
- 金水敏・田窪行則編 (1992) 『指示詞』 ひつじ書房
- 金水敏 (1999) 「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』7月号, 67-91, 言語処理学会
- 黒田成幸 (1979) 「(コ)・ソ・アについて」『林栄一教授還暦記念論文集・英語と日本語と』 41-59, くろしお出版
- 小出慶一 (1995) 「指示詞アーツの選択について」『群馬県立女子大学紀要』 16, 9-20, 群馬県立女子大学
- 正保勇 (1981) 「「コソア」の体系」『日本語の指示詞』 51-118, 国立国語研究所
- 東郷雄二 (2000) 「談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア」『京都大学総合人間学部紀要』 7, 27-46, 京都大学総合人間学部
- 堤良一 (2002) 「文脈指示における指示詞の使い分けについて」『言語研究』 122, 45-77, 日本言語学会
- 吉田朋彦 (2000) 「方角と方向の指示詞について」『日本語 意味と文法の風景 国広哲弥教授古稀記念論文集』 193-209, ひつじ書房

引用資料

- 北 杜夫 『楡家の人びと』
- 沢木耕太郎 『一瞬の夏』
- 椎名 誠 『新橋烏森口青春篇』
- 筒井 康隆 『エディプスの恋人』
- 山本周五郎 『さぶ』 …以上、新潮文庫
- 日高 敏隆・竹内久美子 『もっとウソを！男と女と科学の悦楽』 文春文庫
- 森 瑤子・山田 邦子 『ホホホのほ』 角川文庫
- 山田美保子・やくみつる 『芸能博物館』 小学館文庫